シリーズ回想 「信じ、支える」 106

信じ、支える

理事（元陸上幕僚長）　湯浅　悟郎

はじめに

家族会会員の皆さま、日々の自衛隊に対する協力・支援活動お疲れ様です。心より敬意を表しますとともに、深く感謝申し上げます。

会員の皆さまの中には、配偶者・ご子息・ご息女などお身内が自衛隊員であるという方も多くおられることと思いますが、ご家族がわが国の独立と平和を守るため、崇高な使命感を心に秘めつつ、日々任務にまい進しておられますことにも重ねて感謝申し上げます。

装甲車を活用した派遣活動（陸幕）

自衛隊員の使命感

本稿執筆にあたり、まず、1990年に発生した長崎県雲仙普賢岳の噴火に伴う災害派遣において、第16普通科連隊を主力とした派遣部隊が任務を完遂し撤収する際に、当時の高田長崎県知事が述べられた謝辞の抜粋をご紹介したいと思います。

もちろん、2011年に起きた東日本大震災の災害派遣なども含め、すべての活動において自衛隊員は真摯に黙々と任務遂行しております。

なぜ古い災害派遣であるにも拘わらず紹介したのかといいますと、この謝辞では、自衛隊員の心の奥底に秘めている「使命感」について部外の方（知事）が述べられているため、敢えて紹介させていただきたいと思います。

ちなみにこの抜粋は、使命感の重さ・自衛隊の任務の崇高さ・国民の期待を伝えるために、私が陸上幕僚長就任の際の訓示において引用したものです。

◇ 抜 粋 ◇

「…火砕流（※）はたちまちのうちに貴重な市民の家財を焼失させ、街中を降灰の町と化し、土石流は容赦なく2000棟に余る家屋を押しつぶしました。

当初市民は一瞬にして平和な生活を奪われ、なんらなすすべもなく右往左往しておりました。まさに地獄絵図のようでした。

市民はあの時、何を求めたのでしょうか。ヤマの脅威、恐怖からの安心、わが町の安全です。自衛隊はヤマの脅威に正面から立ち向かってくださいました。忘れもしません。

第1回目の予想もしなかった巨大な火砕流があった平成3年6月3日、尊い43名の方々の命が一瞬にしてヤマに奪われました。

いちるの望みを抱く遺族の願いをかなえるべく、自衛隊はその翌日から連続して3日間、たった今火砕流が来ても不思議ではないあの真っ最中に、火砕流のあった現場真っ只中に入られたのです。

あれくらい、不安でおののいていた市民にとって力強い思いをしたことはなかったでしょう。生命は地球より重いと言われるこの現代の風潮の中で、その地球よりも重い命よりももっと重い「使命感」というものがあったということを、市民はしっかりと見届けたのであります。

自衛隊の真骨頂を見る思いでした。」

（※）火山の噴火の際、高温の岩石・火山灰などが斜面を駆け下る現象で、温度は数百度で時速100㎞を超えることもある。

素晴らしい人間集団

私は、退官して2年が過ぎましたが、自衛隊員が謝辞にあるような使命感を胸に真摯に活動し、ひたむきに任務を遂行している姿を報道などで見るたびに、心よりの敬意と感謝を感じます。

改めて自衛隊は本当に素晴らしい組織であり、素晴らしい人間集団だと思います。

見ず知らずの他人のために極めて過酷な環境下で身の危険を顧みず任務を遂行する職務であるがゆえに、自衛隊員は日々の活動を通じて知らず知らずのうちに人格を陶冶し精神修養を積み重ねていきます。また、過酷な状況において任務遂行するがゆえに、お互いに自らの命を同僚に預けることができる組織たらんとして、強い信頼と絆で結ばれた人間集団に成長していきます。

私の周りの同期や後輩たちも皆一様に、本当に自衛隊に入って良かったとしみじみ言っております。

高額な所得とは縁がありませんが、それゆえに損得抜きで人としての生きざまに真っ向から向き合い、人として成長し純粋な人生を送ることができるとともに、強い信頼と絆で結ばれた組織・環境で日々崇高な使命にまい進する自衛隊という職業は人生をかけるに足る職業だと思います。

自衛隊家族会

私が東京地方協力本部長だった際に、家族会の方々とお話しする機会があり、家族会は最も強力で熱烈な応援団ですねと申し上げておりました。

ご家族が自衛隊員なのですから、自衛隊員そして自衛隊の素晴らしさは会員の皆さまの方がよくご存じだと思いますが、だからこそ、本当に素晴らしいすべての隊員と自衛隊を、強力な応援団として信じ支えていただきたいと思います。

ロシアのウクライナ侵攻

ロシアのウクライナ侵攻において、私が最も強く感じたものの一つが国民の国を守る意志の強さと、政府や軍に対する強い信頼・支持です。2014年のロシア侵攻の教訓が生かされていたのかもしれませんが、侵攻側が展開する情報戦（認知戦）による偽情報の流布などに対しても揺るぎませんでした。

他国に支配されない、自らの国は自らが守るという国民の意志こそが、ロシアの奇襲侵攻をとん挫させる原動力となり、第一線で戦うウクライナ兵士を支えました。そして国民に背中を押されたウクライナ軍は緒戦の受動的苦しい戦況を耐え抜き、その結果、西側諸国の支援を獲得し現在に至っています。

おわりに

自衛隊は国家から国防という崇高な使命を付与された組織として、平時の抑止力の維持・向上から、有事における抑止・対処まで、間違いなく愚直に任務を遂行する信頼できる集団です。

家族会の皆さまには、あらゆる状況下においても、最も強力な応援団として彼らを「信じ、支えて」いただきたいと思います。

よろしくお願い申し上げます。

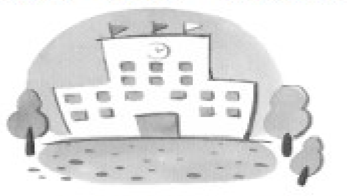
「筆者紹介」

湯浅　悟郎

・昭和34年生　徳島県出身
・防衛大学校28期
・職種：普通科
・主要部隊歴等

S59年	陸上自衛隊入隊
H7年	第30普通科連隊
H18年	第21普通科連隊長
H19年	陸幕人事部補任課長
H21年	西部方面総監部 幕僚副長
H23年	東京地方協力本部長
H27年	第9師団長
H28年	陸上幕僚副長
H29年	西部方面総監
H31年	陸上幕僚長
R3年	退職

「自衛隊の学校・今昔物語」㉜



航空自衛隊・第4航空団

1　松島基地の概要

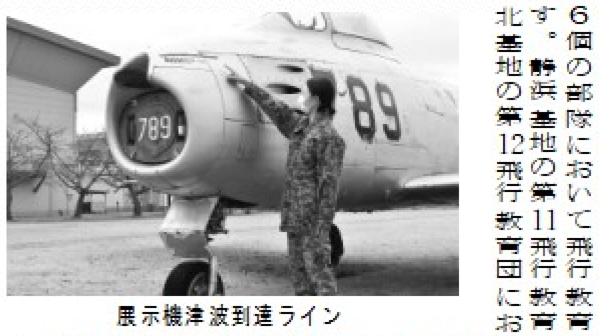
航空自衛隊松島基地は、日本三景で有名な松島湾の東に位置しており、宮城県東松島市に所在しています。基地の歴史は古く、旧海軍の航空基地がその前身となります。戦後の米軍の駐留を経たのち、航空自衛隊の発足に合わせ、昭和29年に臨時松島派遣隊が新設されました。翌年の昭和30年11月に基地が日本に返還、時を同じくして松島基地が発足し、昭和33年には第4航空団が新設されました。

基地の広さは、約360㏊であり、東京ドームに換算すると約78個分の面積となります。基地内には、東西および南北に使用する滑走路をそれぞれ1本有し、その2本の滑走路が交差して配置されていることが大きな特徴となっています。東西の滑走路（約2700㍍）を主滑走路として使用していますが、冬季など北風の強いときは南北の副滑走路（約1500㍍）を使用しています。

2　第4航空団の概要

松島基地には6つの部隊が所在しており、その中でも最も規模の大きな部隊が航空教育集団隷下の第4航空団です。

第4航空団の大きな任務の1つは、戦闘機操縦者の教育です。航空教育集団では、6個の部隊において飛行教育を行っています。静浜基地の第11飛行教育団または防府北基地の第12飛行教育団における初級操縦



展示機津波到達ライン

課程を修了し、戦闘機操縦要員として選抜された操縦学生は、芦屋基地の第13飛行教育団および浜松基地の第1航空団でのジェット機による訓練を経て、晴れて操縦者の証であるウイング・マークを取得します。その後、F－2戦闘機（以下、F－2）またはF－15戦闘機による訓練に進みます。このうち、F－2による戦闘機操縦課程を担当しているのが第4航空団隷下の第21飛行隊です。松島基地における約11カ月間の飛行訓練を修了し、F－2操縦者の資格を得たパイロットたちは、百里基地または築城基地のF－2部隊に配置されます。

第4航空団のもう1つの大きな任務は、第11飛行隊、通称ブルーインパルスによる航空自衛隊の広報活動です。来年度は、年間を通して約20件の展示飛行が計画されています。ダイナミックなアクロバット飛行と華麗な編隊飛行の妙技を日本各地で披露することにより、幅広い世代のより多くの人々にご覧いただき、航空自衛隊への理解を深めていただく機会としております。現在使用している機種は、T－4中等練習機（以下、T－4）で、ブルーインパルスとしては第3代目となります。初代F－86F戦闘機（1960～81年）、2代目T－2練習機（82～95年）を経て、今年で64年を迎えるブルーインパルスの歴史の中でも最も長い期間使用されているのが現在のT－4です。令和2年の聖火到着式および医療従事者に向けた感謝飛行や、令和3年の東京2020オリンピック・パラリンピック開会式における展示飛行では、日本国民はもとより、全世界にもその存在を知っていただく機会となりました。

3　東日本大震災を経験して

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う東日本大震災により、松島基地も大変大きな被害を受けました。14時46分の地震発生から約1時間後の15時54分に津波が駐機場に到達し、時間の経過とともに見る見る水位が増して航空機や車両が瞬く間に流されていきました。翌日以降、被災地への物流空輸拠点としての飛行場機能の復旧作業に取り掛かり、津波の被害が比較的少なかった除雪車を活用しつつも、殆どは人力で汚泥と瓦礫の撤去を行い、3月13日に副滑走路を、3月15日に主滑走路を復旧させることができました。以後、長期に渡って物流空輸拠点として災害派遣活動を支えてきました。

また、基地周辺における災害派遣活動として、東松島市および石巻市など周辺自治体での人命救助および捜索活動をはじめ、炊き出し、給食給水、入浴支援、ブルーインパルス隊員による慰問活動などを行いました。

発災当日、展示飛行のため福岡県芦屋基地に展開していた第11飛行隊は、松島への帰還が不可能であったことから、約2年間にわたり、そのまま芦屋基地に残って飛行訓練を継続しました。第21飛行隊は、すべての航空機が津波の被害を受けたことから、青森県三沢基地において航空機を借用しての学生訓練を約5年間実施しました。

甚大な被害を受けた基地施設については、津波に対する抗堪性向上の各種施策が順次進められました。約4～5㍍高台化された駐機場および航空機格納庫をはじめ、防潮堤や新たな管制塔の整備も順次進められました。

被災後、基地における深刻な問題の1つとして、電力供給に関することがありました。平成7年の阪神・淡路大震災から得た教訓では、高架水槽など緊要な施設を高所に設けないことが減災の方策と考えられていましたが、津波被害に関してはむしろ逆効果であり、停電、通信の途絶、断水、空調機使用不能など、基地機能喪失の拡大を招く結果となりました。この教訓を踏まえ、東日本大震災以降の施設復旧の着眼として、耐震性の確保はもちろんのこと、津波からの被害を最小限とするため、津波到達ラインを基準に各施設の高所化および1階部分の防水処置を進めました。

その後、基地機能の復旧に伴い、平成25年に第11飛行隊が、平成28年に第21飛行隊がそれぞれ帰還し、平成30年にF－2最終修復機の受領をもって、松島基地の復興整備事業を完了しました。

4　地域との関わり

松島基地の所在する東松島市をはじめ、基地周辺自治体との強固な関係性は、基地運営基盤の深化に直結しており、円滑な隊務運営の礎となっています。新年名刺交歓会、春の観藤会、夏の航空祭、年末の基地餅つきなど、基地主催行事に周辺自治体や基地協力団体の方々をお招きし、隊員との交流の場を設けることにより、より一層基地への理解を深めていただく機会とするとともに、地域の祭りや各種イベントへの支援や協力など、地域の方々との良好な関係の醸成に資する活動に積極的に参加しています。

5　おわりに

松島基地は、戦闘機操縦者の故郷であることに加え、ブルーインパルスの母基地であるというその特徴から、全国的に見ても非常に注目度が高い基地の1つであり、公式SNSのフォロワー数は12万を超えています（令和5年12月現在）。もっともっと多くの方々に航空自衛隊や松島基地を知っていただきたいと思いますので、多くの「いいね」とフォローをお願いします。

基地では一般基地見学も受け付けており、今年度は2000人以上の方に松島基地をご覧いただける見込みです。一般基地見学をご希望の方は、松島基地公式ホームページをご覧いただき、案内に従ってぜひエントリーしてみてください。たくさんのご応募をお待ちしております。

震災からの復興の発展期を迎えた基地周辺自治体への貢献を基軸として、これからも地域との共存・共栄をますます深化できるよう基地一丸となってまい進していく所存です。

引き続き、航空自衛隊松島基地および第4航空団へのご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

ブルーインパルスの展示

美佐の新国防論 155

令和6年能登半島地震と自衛隊

元日の16時10分頃、石川県能登地方を震源とする最大震度7の地震と最大5㍍の津波が発生し、今年の正月休みは吹き飛んだというご家族が多いことと思います。

家族が被災しながらも災害対処に尽力されている隊員の皆さんもいると聞き、本当に感謝しかありません。

しかし、連日で現地からの画面に映し出されるのは、避難所などで辛い状況に置かれている人たちの姿で、苦労は報じられる一方で成果は伝えられていないような気がしてなりません。

「〇〇してくれない」の不満の声が自衛隊に向けられていることもあるようですが、災害対処の主体は地方自治体であり、大いなる勘違いに苛立つこともしばしばです。また、政権批判に利用する人もいて、今回の震災対応がいかにも失敗しているかのように喧伝されるのは残念です。

しきりに言われているのは、まず「初動が遅かった」ということです。元日の夕方ということで、自衛官も当直の人以外はほとんどが休みでゆっくり過ごしていたはずですが、動きは極めて迅速でした。

発災の約20分後にF－15戦闘機が偵察のために離陸したのを皮切りに、陸・海・空自衛隊のヘリや哨戒機が次々に飛び立ちました。そして、発災から約1時間後には陸自の金沢14連隊が前進を開始しています。

また「派遣人員が少ない」などの批判も聞かれます。私はそもそも「〇人体制」といった発表はやめてもいいのではないかと思っています。

これには人々を励ます意味はあるものの、それ以上に政治的意図も見え隠れします。まして、発表した人員数に縛られて、数合わせをするようなことになれば本末転倒だからです。

「戦力の逐次投入」だといいますが、これは先の大戦のガダルカナルの戦闘を語る際に知られるようになった言葉で、敵の戦力に対してはるかに少ない人員で対処しようとして失敗し、その都度増強しなければならなかった失敗例です。しかし、戦闘と災害派遣は違います。

道路が寸断されて近づけない状況の災害派遣ではむしろ正しい方法と言えるでしょう。

今回は被災地に小規模の自衛隊しか存在せず、総監部などが所在した熊本地震などと比べ、状況は全く異なります。また、運用は兵站なども加味した上で考えられるべきであることはいうまでもありません。

責められるのを避けたいがために自衛隊に無謀な活動を強いることがないよう、引き続きお願いします。というのは「空から支援物資を投下すべき」「空挺隊員が降下したらいい」などトンデモ言説も飛び出していたからです。

自衛隊はヘリからのホイスト降下で物資を運びました。悪天候もあり、簡単なことではありません。訓練を積んでいる自衛官だからこそできることです。それすらできない場所に物を落とせというのは地上にいる人にとって大変危険であり、とても現実的ではないでしょう。

年初に陸自第1空挺団の降下訓練始めが行われたことを受け、それをするなら被災地にパラシュートで降りればいいなどという声まで出たようですが、仮に降下できたとして、その隊員はひとりが運べる限定的物資を運んだ後は被災者とともに支援を待つということなのでしょうか。これも驚かされる話でした。

災害に見舞われても国の防衛に関わることは決して怠っていない姿を示すことこそが極めて大事で、こうした時に教育・訓練を滞らせないことが国民の安全につながるのですが…。

一方、こちらも気になっているのは、自衛隊を応援する方々による装備やさまざまな不備不足を指摘する声が、ややもすれば過剰な盛り上がりをみせ、政局に利用されかねないことです。

全ての隊員に物がいきわたるには時間を要します。生産能力の問題もあります。防衛費が増額された今は、これまで言い出せなかった数々の「我慢」を汲み上げる移行時期であり、もどかしいですが反映されるのはもう少し先でしょう。

また「不備」に見えることも実は軍事組織の特性である場合も考えられ、やはり詰まるところ、自衛隊の本質を理解してもらうことが今後日本の課題であると再認識させられています。

（執筆者プロフィール）

桜林 美佐（さくらばやし みさ）

東京都生まれ。日本大学芸術学部卒。ディレクターなどとしてテレビ番組制作に携わった後、防衛問題研究家に。著書に「奇跡の船『宗谷』」「海をひらく 知られざる掃海部隊」「誰も語らなかった防衛産業」（並木書房）、「終わらないラブレター祖父母たちが語る『もうひとつの戦争体験』」（PHP研究所）、「日本に自衛隊がいてよかった－自衛隊の東日本大震災」（産経新聞出版）、「ありがとう金剛丸－星になった小さな自衛隊員」（ワニブックス）、「武器輸出だけでは防衛産業は守れない」「自衛隊と防衛産業」「自衛官が語る 災害派遣の記録（監修）」「自衛官が語る 海外活動の記録（監修）」（並木書房）、「本音の自衛隊（産経NF文庫）」「危機迫る日本の防衛産業（産経NF文庫）」など多数。

きずな

「活字のすゝめ」

監事　渡邊　至之

本来の活字という言葉は、活版印刷に用いられた凸字型を指すものです。現代においては、歴史資料館などにおいて、辛うじて目にすることができる珍品かもしれません。しかし、この言葉は、今でも新聞、本、雑誌など紙に印刷されたものの代名詞として、広く一般的に使われています。

近年インターネットの爆発的な普及により、われわれの情報源は、スマートフォンやパソコンを介したウェブ情報がメインとなっています。何時でも何処でも必要な情報に容易にアクセスできるという利便性においては、これに優るものはないかもしれません。

そのトレンドに逆らって、私が未だ活字に拘っているのには、大きな2つの理由があります。

その1つが、瞬時にして得られる情報量の多さです。例えば「おやばと」先々月号の第1面を概覧しただけで、5種類の異なる話題を認識し、興味を持った内容の細部を読み取ることができます。おまけに下欄の企業広告や自衛官採用情報などにも目が留まります。

これだけの情報をほんの2、3分で読み取ることができるのは、広い紙面の活字だからこそではないでしょうか。

もう1つの理由は、情報の信頼度をある程度確保できる点です。紙の印刷物は、その発行元が明確であることから、悪意のある改ざんや偽情報の発信は、比較的少ないように思います。一方、インターネット情報の大半は活字と同様でも、一部に不特定の個人が安易に書き込む主観的見解や根拠に乏しい情報などが氾濫しています。さらには悪意あるフェイクニュースも急増しています。その中から適切な情報を選別するには、ひと手間かける必要もあるでしょう。

そのようなことから、私は情報収集手段として活字を主、パソコンを従としています。スマートフォンは、ほとんど使いません。画面面積の制約から、必要な情報をある程度引き出すには、いろいろな画面をいくつも呼び出さざるを得ず、それに相当な時間を要するからです。人間の視覚による情報処理能力は非常に高く、景色などを一瞥しただけで得られる情報量は、とてつもなく膨大なものです。それをわれわれが情報収集に活用しない手はありません。

私は、以前から後輩たちに、日々新聞の第1面から最終面まで、一瞥だけでもいいから、すべてに目を通すことを勧めています。政治・経済・国内外情勢といった主要分野だけでなく、3面記事や興味本位の表現が目立つ週刊誌の見出し広告まで全部です。深く読む必要はありませんが、毎日1つや2つは興味を持てる情報に巡り合うはずです。それだけを熟読すれば十分です。その積み重ねが、雑学とはいえ知識を深める一助となるだけでなく、人としての幅を広げる基本ではないでしょうか。それが私の「活字のすゝめ」です。